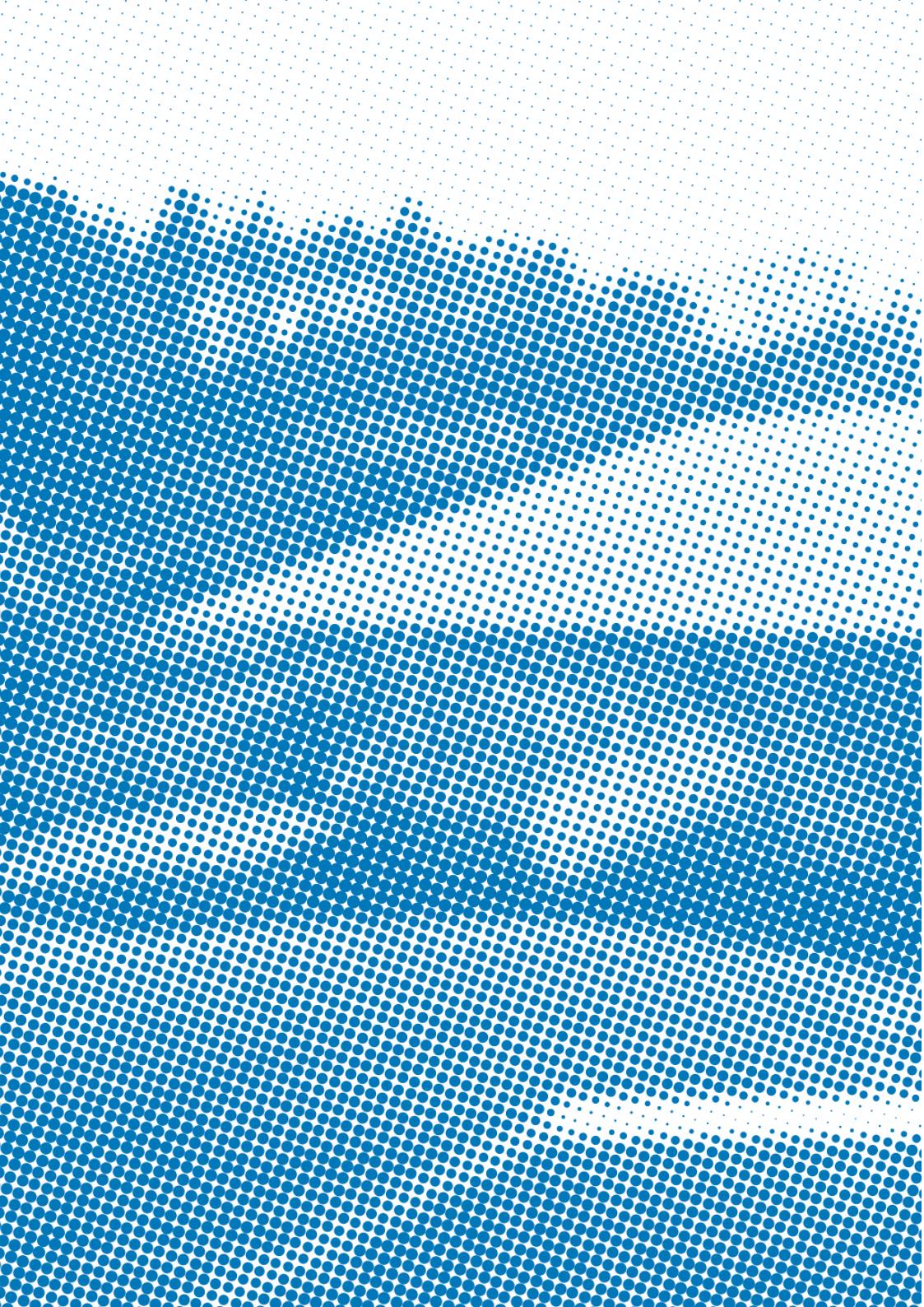


いわて
きこえる

02

五感で出会う、いわてまち





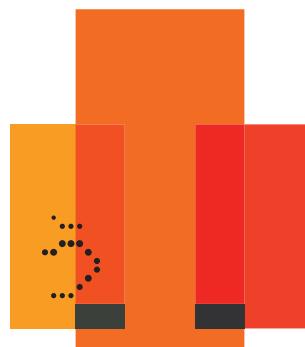
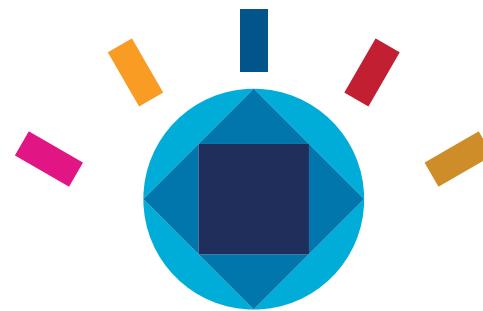
EXPAND

and

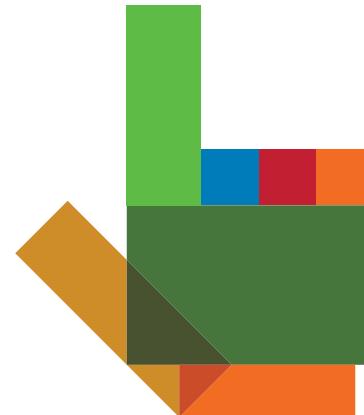
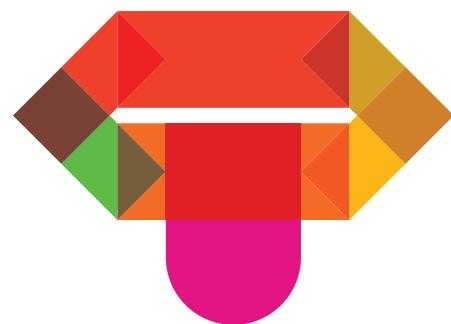
Feel

your

Sensibilities

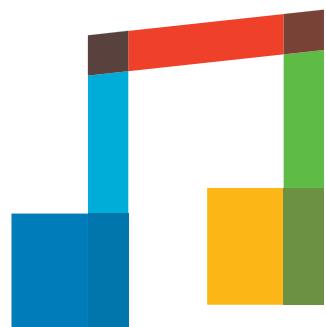


五感で出会う



いわてまち

ざつぶーん、サワサワ、スサッースサー。
五感を研ぎ澄まし耳をすましてみると、この
町には感性を刺激されるような音や場所が溢
れている。ふと住宅の裏山に入ると心癒され
る森や動物たちの居場所が残っていたり、美
しい川で遊びながら、土地の水脈や地球との
つながりを感じたり。身近にあるのに、忘れ
ていたさまざまな存在に想像をめぐらせなが
ら、この冊子を片手に自分の感覚とゆっくり
向き合う時間をこの町で体験してみませんか？



岩手町 SDGs 未来都市共創プロジェクトは、
町内外の方々の対話を通して、まちの新たな価値を生み出すための試みです。

共創の過程で、まちのことが自分のことになり、
岩手町が誇る〈農業〉〈保健福祉・スポーツ〉〈森林・ものづくり〉といった
この土地の真価を活かし、取り組みを活性化することを目指します。

人が生きると、まちが生きる。
そんな、人と風土を活かした
未来に続くまちづくりに取り組んでいきます。



岩手町

SDGs 未来都市

共創プロジェクト

目次

自然と人間の営みが共鳴する、岩手町の音風景	8
石神の丘美術館で身体全体でアートを感じる	10
森林セラピーロードでヒーリング	14
町のレジリエンスを高める、未来都市へのウォーキング	16
お口直しは、町の木の実で	19
北上川をまたぐ	20
キャベツのあまい味にかくされた土地との強いつながり	22
音で感じる、岩手町の風景	26
子どもたちと探究する、川と暮らしのつながり	28
岩手町から世界へ、ホッケーがつなぐ夢	34
この町の酸いも甘いも	36
思い思いの時間を過ごす、町の憩いの場	38
岩手町 SDGs 未来都市共創プロジェクトについて	40

*SDGs 未来都市とは、SDGs の理念に沿った基本的・総合的取組を推進しようとする都市・地域のうち、特に「経済・社会・環境」の3つの側面における新しい価値創出を通して、持続可能な開発を実現する潜在力が高い都市・地域として内閣府より選定するものです。岩手町は、小さな自治体でありながら持続的なまちづくりを戦略的に行う活動が評価され、内閣府より 2020 年に選定されました。

この冊子の使い方

この冊子は、あなたと岩手町が出会うためのツールです。読み方は自由、バラバラとめくりながら気になった言葉や人に偶然出会って、この町を探索したり、新たに訪れてみて欲しいという思いから生まれました。冊子の最後には、町を使いこなすための「ワークシート」も用意しました。書き込んだり、ちぎったりして活用してください。

SDGs カラー対応表

本文のページ右端には、それぞれの記事が、持続可能な開発目標（SDGs）である 17 個のアジェンダのどれに該当するかを色で示しています。



町の中の大きな自然、
丹藤川で五感を研ぎ澄ます

田舎町を盛る「丹藤川」は、様々な生き物たちが生息している美しい川です。一年一回、丹藤川で水浴びする「丹藤川の夏祭り」が開催されています。

「丹藤川の夏祭り」では、祭り



生き物もたちはじめの居所へ

丹藤川では毎年、子どもたちへの日帰り旅行プログラムを行なっています。「丹藤川の夏祭り」や「丹藤川の冬祭り」などを主催するのが、地元の農業協同組合の組長でもある佐々木一秀さん。丹藤川の夏祭りの開催時期は毎年7月上旬で、丹藤川の川底で魚を放流したり、町の子どもたちと共に、五感を使って自然を感じる体験を行なっています。

—13 気候変動に具体的な対策を

—15 陸の豊かさも守ろう

各ページ右上に、記事の取り組みに関連した SDGs アジェンダを色で示しています。

17 の持続可能な開発目標について



1 貧困を
なくそう



2 飢餓を
ゼロに



3 すべての人に
健康と福祉を



4 質の高い教育を
みんなに



5 ジェンダー平等を
実現しよう



6 安全な水とトイレ
を世界中に



7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



8 働きがいも
経済成長も



9 産業と技術革新の
基盤をつくろう



10 人や国の不平等
をなくそう



11 住み続けられる
まちづくりを



12 つくる責任
つかう責任



13 気候変動に
具体的な対策を



14 海の豊かさを
守ろう



15 陸の豊かさも
守ろう



16 平和と公正を
すべての人に



17 パートナーシップで
目標を達成しよう

// 自然と人間の営みが共鳴する、岩手町の音風景 //

「きこえるいわて」編集部が、岩手町を「音」の視点で巡るスポットを選定したモデルコース。音から場所を散策することは普段しないかもしれませんのが、自然や文化、生活など、音がじんわりと「きこえて」くる岩手町がそこにはあります。岩手町に住んでいる方も、はじめて岩手町を訪れる方も、スポットの近くに訪れた際はぜひ耳を澄ませてみてください。

北上川の源泉に耳を澄ませる

岩手町には、東北最大の河川である北上川の源泉・弓弭（ゆはず）の泉があります。岩手町からはじめ、宮城県石巻までと続くその流路は 249km に及びます。弓弭の泉から広がる河口までの長い旅路や、その水環境がもたらす生態系などに思いを馳せながら、そこに流れる音に耳を澄ませるもの一興です。

北上川源泉 弓弭（ゆはず）の泉
岩手県岩手郡岩手町大字御堂第3地割9



雨上がりの森林セラピーロードで癒しの音を

岩手町スポーツ文化センター「森のアリーナ」の周辺には、岩手町森林セラピーロードの中心となる「ゆうゆうの森」があります。森林セラピーロードとは、木々の匂いやざわめきなど、その土地が古くから持つ自然の要素が科学的に癒しの効果をもたらすと認定された道・地域のこと。

そんな森林セラピーロードとして認定された散歩道では、木々が風に揺れて掠れる音、木の実が落ちてくる微かな音、そして鳥たちのさえずりが調和して響き渡っています。とりわけ、雨上がりのセラピーロードでは、樹の葉に溜まった雨水が上から不思議なリズムで地面に落ちてきて、その音はまるで大きな水琴窟（すいきんくつ）の中にいるような感覚にさせてくれます。自然の中で微かな音に耳を澄ませて、ぜひ心穏やかな時間を味わってみてください。

岩手町 スポーツ文化センター・森のアリーナ
岩手県岩手郡岩手町大字子抱第5地割142



丹藤川の遊歩道で水の音を聞き分ける

丹藤川の渓流遊歩道では、いろいろな川の表情を音で聞き分けられます。橋の上にいると聴こえるぱしゃぱしゃとした激しい音から、岩が奏でる心地よい水流のリズム、そして遠くから反響するささやかなハーモニー。川沿いの歩道では、隣に流れる川の音をバックグラウンドに、落ち葉を踏んでバリバリと自分でリズムをつけていく楽しみ方も。丹藤川の表情を、音からぜひ読み取ってみてください。

丹藤川渓流
岩手県岩手郡岩手町大字川口第19地割98



新幹線と銀河鉄道が交互に響き渡らせる音

岩手町沼宮内第5地割から第6地割にかけて続く道に、誰かが設置したであろうベンチにいると、町のランドマークならぬサウンドマーク的な新幹線とIGR 銀河鉄道の音が聴こえできます。頻度はあまり多くないですが、運がよければ、あなたも新幹線と銀河鉄道の音で交互に包まれる岩手町を聴くことができます。岩手町と、この町から繋がるあらゆる地域を想像しながら、ぜひゆっくりベンチに座ってみてください。

旧ふじきんの裏に設置されたベンチ
岩手県岩手郡岩手町沼宮内第6地割



流雪溝から聴こえてくる、町の息遣い

冬場に積雪量が多い岩手町では、道路の下に水路を整備し、自然の水流の力で雪を排出する流雪溝が町の至る所で見受けられます。雪が降らない季節でも、そこには勢いよく水が流れ、町の中を生き生きと水が流れ続けていることが音からよくわかります。勢いが強いところから、とてもゆるやかなところまで、町に張り巡らされた水路を辿って町を歩いてみるのも面白そうです。

岩手県岩手郡岩手町大字第9地割33

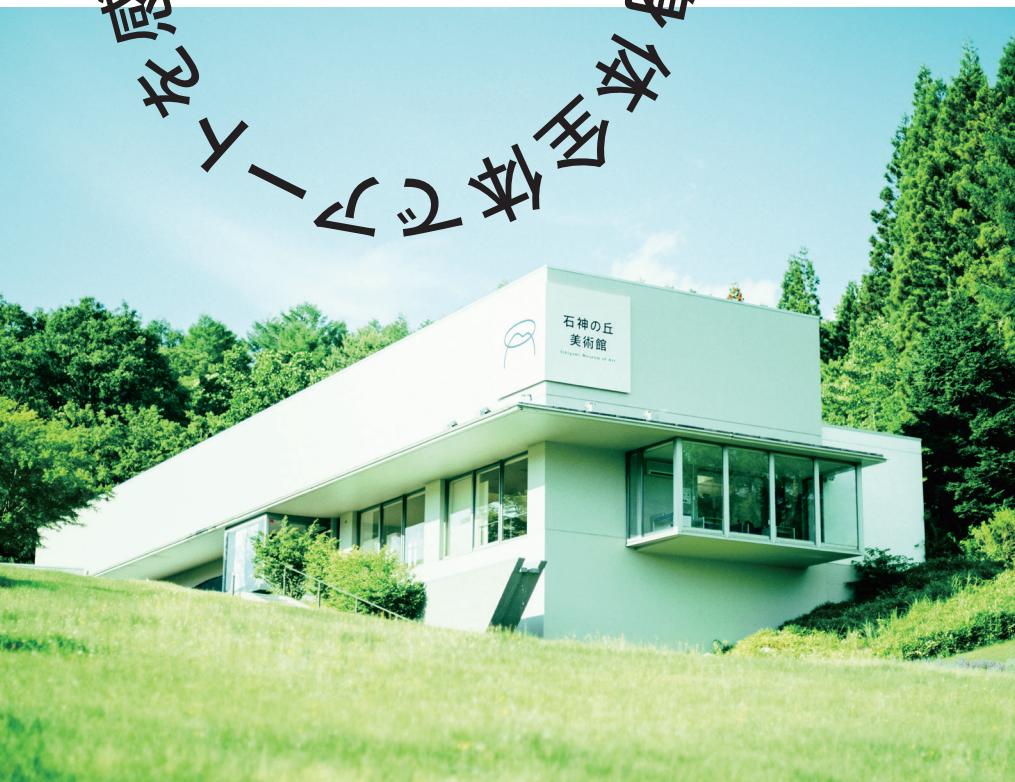


受け継がれる「秋まつり」の文化を音で感じる

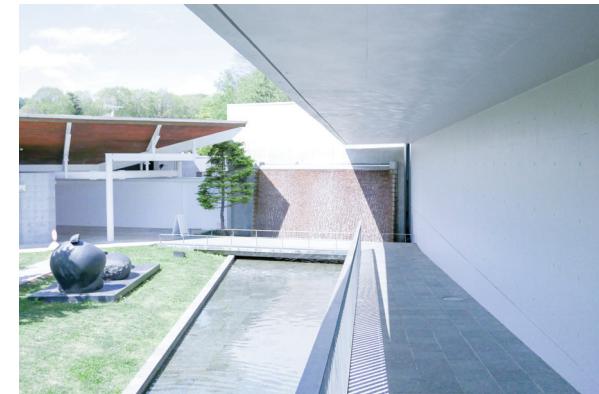
岩手町では、豊穣への感謝の気持ちを込めて、毎年10月初旬の3日間にわたって「岩手町秋まつり」が開催されます。郷土芸能の舞や山車とともに奏でられる古くから伝わるリズムや音は、現代に生きる私たちの琴線にも触れる音です。地域によって異なる独特なリズムを、ぜひ聴き比べてみてください。

岩手県道17号（岩手銀行 沼宮内支店前）
岩手県岩手郡岩手町大字沼宮内第7地割14-11

石神の丘美術館で身につく感覚



石神の丘美術館
岩手県岩手郡岩手町大字五日市10-121-21
「道の駅石神の丘」となり



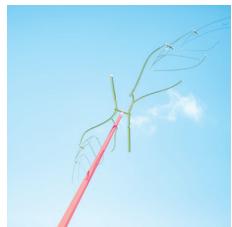
岩手町と聞くと皆さんは何を思い浮かべますか？ キャベツやブルーベリーなど様々な特産品も有名ですが、この町に降り立って多くの人がまず町中にある「野外彫刻」の多さに驚くのではないでしょうか。

中でも存在感を放つのは、道の駅に隣接した「石神の丘美術館」です。この美術館は、1993年に岩手県では初となる野外彫刻美術館として開館しました。その背景には、1973年から30回にわたり開催されてきた「岩手町国際石彫シンポジウム」の伝統があります。

昭和48年から始まった岩手町国際石彫シンポジウムは、国内外から作家を含めて、毎年町産の黒御影石を主に使用して公開製作を行ってきました。現在シンポジウムは開催されなくなってしまいましたが、それまでに作られた多くの作家の作品を今でも見て、触れることができます。

2002年には隣接地に道の駅「石神の丘」が設置され、アートだけでなく、ふらっと晩御飯のおかずに、どれたての新鮮な野菜を買いにしたり、地元の農家のお母さんが作ったお惣菜やお菓子などの食も楽しめる場所として、町内外の方で賑わっています。

美術館の広々とした屋外展示場「花とアートの森」には、石神山（標高326m）の斜面を利用した散策エリアやデザイン遊具が設置され、自然の中で触れ合いながら彫刻作品に触れることができます。また、四季を通じてエリアごとに様々な草花を楽しむこともできるので、お散歩をするに歩くだけでも気持ちがいいのも特徴です。アートを鑑賞するだけでなく、それに関わり、土地と対話するきっかけをくれるような、そんな場所です。



HEALING IN THE FOREST

落ち葉の匂い、木の香り、土の手触り、風の音。森の中には私たちの五感を刺激し、心や身体を整えてくれる瞬間が溢れています。岩手町のスポーツ文化センター「森のアリーナ」の裏手に広がる小高い山「ゆうゆうの森」では、毎年「森林セラピー」の活動が行われています。森林セラピーとは、科学的な証拠に裏付けされた森林浴のこと、森を楽しみながら心と身体の健康維持・増進、病気の予防を行うことを目指した活動をいいます。例えば、森の中で呼吸法やヨガ、アロマテラピー等を組み込んだ心のリラクゼーション・プログラムを行ったり、ウォーキングやノルディックウォーキングの運動を通じた身体のフィットネス・プログラムを行ったり、医師と連携して健康相談を行う森の過ごし方もあるようです。森林セラピーは、ハイキングでも、登山でもなく、健康のために森に入る、新しい森の楽しみ方です。

ゆうゆうの森に入るとまず「どんぐり広場」と呼ばれるベンチが円形になった広場にたどり着きます。森林セラピーのプログラムでは、ここでみんなで寝転がりながら、草木が触れ合う音や生き物たちの小さな鳴き声に耳をすましたり、ゆっくり呼吸をしながら自分のリズムを感じたり、森の中で自分を整える時間を過ごします。

徐々に進むと、背の高い木も増えだし、さっきまで自分が町中にいたことを忘れてしまうように、時間がゆっくりと流れていきます。居住エリアと森がこれだけ近くにあるのも、岩手町の魅力です。コースの終着点は高台になっていて町を見下ろせる場所も。ここで一息つきながら、考え事にふけるのも、何も考えないでただボーッとするのも心地がよくおすすめです。子ども連れでも、1人でも、気軽に歩けるコースなので是非、自然とのつながりを感じに訪れてみてください。

岩手町森林セラピー基地 「ゆうゆうの森」
〒028-4304 岩手県岩手郡岩手町大字子抱第5地割1-42

森林セラピーランド
森林セラピーランド



町のレジリエンスを高める 未来都市へのウォーキング



岩手町では町民の健康増進を目的に、リビングラボの一環としてウォーキングプロジェクトを実施しています。実際に岩手町を歩いてまわるリアル・ウォーキングから、デジタル空間上で仮想的に岩手町を歩き回るヴァーチャル・ウォーキング、そして遠隔の人とも通信で接続し対戦できるesportsまで、岩手町のウォーキングやエクササイズの取り組みは多彩です。町を歩く、というシンプルなアクションから、“町の基礎体力”を鍛え、未来都市への道標とすることはできるのでしょうか？

町民全員を健康へと導くウォーキング

岩手町では、持続可能なまちづくりのために、全世代が生き生きと生活できる環境や風土自体を醸成していくことを目的とした取り組み「健幸ウォーキングプロジェクト」が行われています。

もともと岩手町では、地域や医療関係者など多様な関係者が協働する「岩手町方式」による検診体制を整えたことによって高い検診率を達成したり、地域一体で高齢者のケアを行う安心生活支援ネットワーク事業「安心生活あいネット」を全国に先駆けて実施するなど、保健福祉において安心して生活するためのシステムを構築してきた背景があります。このように、保健福祉への意識が地域として行き届いている岩手町においても、よその地域と同様に高齢人口の増加や運動機会の減少は大きく影響しています。そこで、町民の健康意識の向上を図ろうと組まれたのが、この健幸ウォーキングプロジェクト。健康や福祉をテーマとし、対象者が高齢者のみならず町民全員を対象にしているのが、このプロジェクトの特徴です。

どんな世代においても健康で安心して暮らせる町であれば、災害などの有事の際もコミュニティ全体として回復していく力は自ずと強くなります。町民の健康意識が高く、町民同士のコミュニケーションも日常的に行われているような、そんな町としての「しなやかさ」を育むことにも繋がる手段として、このウォーキングが行われています。

リアルとデジタルを行き来しながら歩く岩手町

健幸ウォーキングプロジェクトでは、大きく分けて3つの種類のウォーキング・エクササイズが行われています。一つ目は、実際に岩手町を歩いて回るリアル・ウォーキング。リアル・ウォーキングでは、岩手町体育協会主催の毎週のウォーキングプログラムが実施されているほか、町内外を対象にハイキングコースを団体で歩くことが積極的に実施されています。

二つ目が、ヴァーチャル・ウォーキング。インターネットや通信環境などの情報技術を活用することで、どの町を歩いても岩手町を歩いたかのように距離を表示することもでき、たとえば、東京の街を歩いていても、アプリ上で「本日の移動距離、石神の丘美術館から北上川源泉いわてまち川の駅です」と仮想的に岩手町を歩くことができるのです。また、テレビ岩手と共同開発した携帯アプリケーションでは、GPSを利用することで、岩手町を実際に歩きながらデジタルマップ上でスタンブラーをクリアしていくことも可能です。リアルとデジタルを行き来することで、誰でも岩手町でのウォーキングをすることができます。

三つ目に、esportsがあります。esportsは、あらゆる世代が頭脳と身体を駆使して遊び交流する機会にもなり、NTT東日本と協働で岩手町に整備された高度無線環境により、公民館同士をビデオ会議ツール「Teams」で接続するなど、直接対面しないとも対戦することも可能になっています。これらの取り組みは、身体を動かして健康意識を向上させつつ、世代や場所の制限を越えた新しい交流の在り方としても注目を集めています。

レジリエンスを引きこむウォーキングプロジェクトへ

多様なウォーキングやエクササイズによって町民の健康で幸福な生活を支援する健幸ウォーキングプロジェクトは、健康意識のみならず、コミュニティ内外の連帯、ひいては町全体の社会的な回復力（レジリエンス）の向上も目的としています。

高齢者だけでなく、人生100年時代における健康の在り方をあらゆる世代で意識して、歩行や運動に取り組み、そこから町内や町外とのコミュニケーションを促進し、町や都市同士が相互的に回復力を高めることではじめて、持続可能な未来都市をつくりあげができるのではないかでしょうか。リアルとデジタルを行き来可能な岩手町から、未来都市の礎を築く一歩が踏まれることを祈って—。



お口直しけ
町の木の実で



初秋を知らせる、町の木の実を見つけに

岩手町役場前の彫刻公園には、赤々として美味しい木の実がなっています。

その正体は「ヤマボウシ」という木の実。6～7月に白い花を咲かせる落葉高木で、秋の訪れを知らせるように、9月初旬に実りをむかえます。町の中でもヤマボウシは知る人ぞ知る木の実。

熊や猿、鳥たちの好物でもあるこの実は、なかなか市場には出回ることはないようです。近づいてみると、さくらんぼのような形でふっくらとした実に特徴的なイボイボがついています。

彫刻を見に、孫を連れて散歩をしているおじいさんが、「こうやって散歩がてら、たまにお土産を持っていくんだよ」と、帰り道にいくつか熟した木の実を嬉しそうに持つて帰るなんて姿も。そして「公園でピクニックをした時に、ヨーグルトにトッピングするのがおすすめです」という町の女性たちも。

なるほど、普段何気なく通り過ぎている道も、その視点で見ると意外と豊かな実りの宝庫に見えてくるのかもしれません。ちなみにヤマボウシは、そのまま食べてもよし、ジャムにするのもよし、冷凍してシャーベット状にして食べるのも美味しいようです。

石神の丘美術館のなかや町なかに、目を凝らすと実っているヤマボウシを、お昼ごはんの後のお口直しに探してみてはいかがでしょうか？

岩手町彫刻公園

〒028-4307 岩手県岩手郡岩手町大字五日市10-19-3
「岩手町役場」となり



不思議な力を感じる、北上川の源泉を訪ねて

東北随一の北上川は、どこから流れているかご存じですか？ 岩手県の中央を北から南に流れるシンボリックな川は、ここ岩手町の御堂観音境内の湧水を源泉としていると言われています。また、言い伝えによれば、大同2年（807）坂上田村麻呂の草創、一族了慶の開基と云われ、御堂観音は

天喜5年（1057年）、前九年の役で安倍一族と戦った源義家がこの地に立ち寄った際、ここに清水が湧き出て炎天下に苦しむ兵馬を救ったことに感謝してお堂を建立し、観音像を安置したとされています。境内の奥へと進むと、右正面に雷にうたれた大木の後が。真っ二つに割れたその姿は、どこか自然の威力と壮大さを感じさせる風景です。そして、その大木の根元には、北上川の源泉



北上川をまたぐ



ともいわれる「弓弭（ゆはず）の泉」があります。「弓弭の泉」の由来にはこんな伝説も残っています。

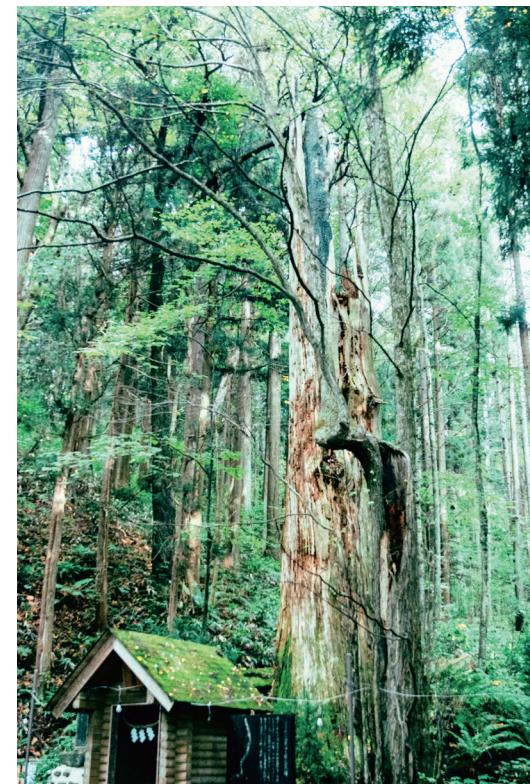
「平安時代天喜5年6月、源頼義、義家父子率いる朝廷軍はこの地方の豪族・安倍氏を討つため軍を率い、北へと進軍していたところ打続く炎暑に兵馬とも疲弊し、士気も上がらなかつた。そこで、源義家はふと思いついたように、巨大な杉の木を見つけ、祈願し、天に向かい矢を放ち、矢の刺さつた大杉の根元を手にしていた弓弭（弓のつるをかける先端部分）で突くと、にわかに清水が湧き出てきた。兵馬ともごくごく清水を飲み、ついにはみな生き返ったように元気になり、安倍氏を討ち、のちに『前九年の合戦』と言われる長く続いた戦乱を鎮圧した。それ以降、義家が『弓弭』で掘つ

て湧き出た清水は『弓弭の泉』として人々からあがめられた」

境内の外に出ると、北上川の小さな水脈が流れ出てきているのも見ることができます。地元では、この小さな水脈をまたいで「北上川をまたぐ」遊びをしたり、落ち葉が詰まっていたら人間の手でそれを取り除いて水脈が滞らないようにしたり、小さな自然の源を見守っています。



御堂観音 / 弓弭の泉
〒028-4306
岩手県岩手郡岩手町大字御堂
第3地割 地内



大木の目の前で手を上にかざすと
ジーンと祖先がピリピリして
不思議なパワーを感じるなんて噂も。

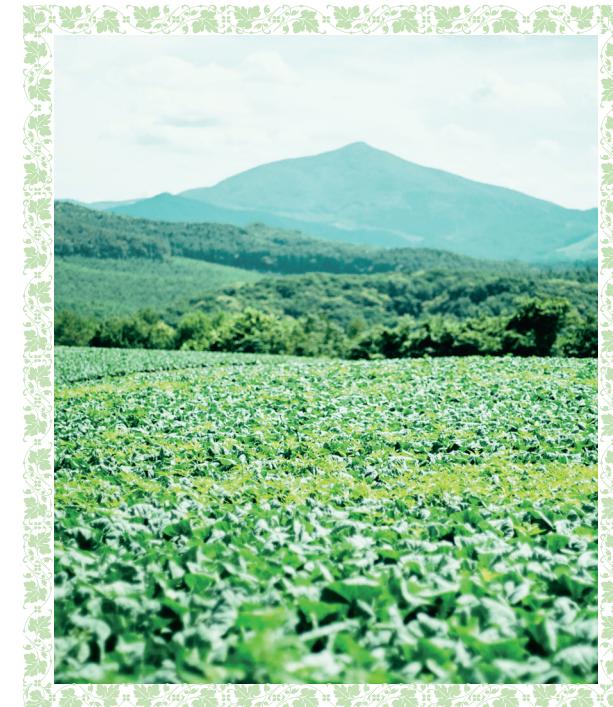
キャベツのあまい味にかくされた 土地との強いつながり



岩手町を訪れた人が口にして驚くのは、この町の「キャベツの甘さ」です。岩手町はその歴史をたどれば、明治の頭にキャベツの生産を始めてから、100年もの間キャベツの産地として栄えた土地でした。標高が高く、昼と夜の寒暖差もあり、より甘いキャベツが育つに適した大地だったといいます。

当初主流だった、「南部甘藍（なんぶかんらん）」という品種で日本一の出荷量を誇り最盛期を迎えた時代もあった一方、病害や生活様式の変化と共に出荷量も激減していったといいます。そんな中、1980年代に再びキャベツの産地を目指そうと岩手町の生産者有志が立ち上がって栽培に取り組み始め、現在、JA新しいわのブランドとして栽培されている「いわて春みどり」でした。

一度は衰退し立ち上がった力強い背景とは逆に、柔らかくて甘いこのキャベツは、今では岩手町を代表する名産品に成長しています。道の駅「石神の丘」施設内にある「産直石神の丘」では、生産者の顔が見える形でメッセージと共に販売されています。併設している「レストラン石神の丘」でも、キャベツをふんだんに使った美味しい料理を味わうことができおすすめです。



キャベツ愛から生まれた
愛すべきアンオフィシャル
キャラクター「キャベツマン」





ラベンダー畑の香りに酔いしれる

撮影ポイント

石神の丘美術館

岩手県岩手郡若手町大字五日市 10-21

音で感じる、岩手町の風景



きこえる いわて

「きこえる いわて」は、岩手町との様々な繋がり方をお届けする、岩手町SDGs未来都市共創プロジェクトの公式Webサイトです。訪れる人が岩手町にある豊かな自然や土地が奏でる音、人や暮らしが織りなす音、その一つ一つに感覚を研ぎ澄まし、この町と出会ってほしいという思いでつくりされました。まちの中の人も、外の人も、岩手町をもう一步深く豊かに知るための道具として活用してください。

ざっぶーん 鹿の水浴び  ざっぶーん 鹿の水

花とアート  サワサワ 花とアート  サワサ!

 ほおおおん 森で巨大建築と  ほおおおん

景  がたごと こんこんぱとりかさり 音の風景

づくり  スサッースサツー 職人のものづくり

ブ 川の暮らし  ジャブジャブ 川の暮らし 

能  ドッコイヤンサカ集まりさんさ 郷土芸能

子どもたちと探究する、
川と暮らしのつながり



北上川源泉のまち、岩手町。岩手県から宮城県に流れる北上川は、全長249km の日本で5番目に長い河川で、その源泉は岩手町の北部に位置する御堂観音（みどうかんのん）の境内にある「弓弭（ゆはず）の泉」と言われています。

岩手町では、子どもたちが自然のなかで遊びながら川の生き物や川と私たちの暮らしのつながりを学んでいます。そのプログラムを実施している団体のひとつ、一般社団法人いわて流域ネットワーキングの代表 内田尚宏さんに、岩手町での川の環境教育や、北上川とここで暮らす人々とのつながりについてお話を伺いました。

川には、子どもの感性を引き出す力がある

内田さんがいわて流域ネットワーキングで主に実施しているのは、岩手県全体での環境活動。川にどんな生き物がいるのかを調べる水生生物の調査や環境学習を行い、年間約700名程の子どもたちが参加しているそうです。その狙いは、「川と私たちの暮らしのつながりを子どもたちに知ってほしいから」と内田さんは話します。

「子どもの頃から、自分の故郷や身近な自然に親しむということがとても大切だと思っています。20数年この活動をしていますが、やはり幼少期、小学生・中学生の時に自然にからだで触れる、知る、という体験をすることが、環境を考えることに非常に役立つと実感しています」

活動をするなかで自身も岩手で子育てがしたいと考えるようになつた内田さんは、お子さんを川に連れて行こうとした時、教育現場における川体験の捉え方の違いを感じることになります。

「川での自然体験のプログラムとして学校にも案内に行ったところ、なぜそういうことをするのか、と問われました。安全対策はきちんと取っていたものの、そもそも参加者自身の川の経験が少ないために学校として責任がとれないと。学校としては『川は危ないから入ってはいけません』と日頃から注意喚起しているわけですが、これでは自然からどんどん遠のいてしまう。禁止するのではなく、『敵を知り己を知れば百戦殆うからず』じゃないですが、危険を学び、正しい付き合い方を知ればいいのです。そうやって自然と積極的に触れていかなければ、災害時や有事の際に大きな事故になるし、自然の楽しさや大切さを体感することなく大人になってしまう」



一般社団法人いわて流域ネットワーキング 代表
内田尚宏さん（写真提供：内田尚宏）

大人がなんと言おうと、子どもは魅力的なものを見つければつい近づいたり、触ったりするもの。内田さんは、水遊びがしたい子どもを川から引き離すのではなく、安全講習から始めることにしました。

「川に子どもたちを導くための手段とも言えますね（笑）。川の環境学習、安全講習として子どもを川に連れていく、生き物との触れ合いを始めたというのがいきさつです。子どもたちは実際川で虫や魚を捕まえると、本当にいきいきするんですよ」



水生生物調査の様子（写真提供：内田尚宏）

内田さんの20数年に及ぶ川の体験プログラムで育った子どもたちは、今はもう立派な大人に。学校で環境問題を専攻し盛岡市役所や岩手県庁に務める人もいるそう。

「僕は、子どもたちの好奇心や探究心、不思議だなと思う気持ちや感性をわーっと引き出す力が、川にはあると思っています。大学に講義を行った時など、この前まで川ではしゃいでいた子たちが大きくなって、『あ、うっちーだ！』なんて話しかけてくれるのですが、『昔キャンプで水生生物のこと教わりました』なんてちゃんと憶えていてくれるんですよ。少し前までは、環境問題というと（経済産業を優先しようとする）行政と対立する構造があつたりしましたが、そんな“戦い”はせず、次世代を担う子どもを育てた方がいい。彼らも大きくなつて仕事を始めて、そろそろ実を結ぶ頃かもしません」

行政と連携した継続的な学習で実現する、きれいな川づくり

内田さんが展開する学習プログラムは主に2つ。川遊び中に何かあっても対応できるように学ぶ「安全教室」と、水生生物に対する水質調査を行う「環境学習」です。この水質調査は国が定めたルールに基づいて行われ、学校の授業や地域活動として、川の水生昆虫から水質を判定したりするそう。

川の生物と触れ合いながら水質をチェックした子どもたちは、水質のいい状態、悪い状態を知るなかで「どうすればこの水をもっときれいにできるんだろう？」と考え始めます。

「フィールドでの体験学習は、魚と他の生き物、水生昆虫と魚の関係性や川のつながりについて話し、きれいな川について考えるきっかけをつくるところまで。きれいな川を実現するために色々考えたり調べたり実験して学習に結ぶのは、1日2日では難しいです。継続的な学習を学校で実施できたらいいですね」

岩手町では、現在学校と連携した仕組みづくりを計画中。教育分野では、岩手県立沼宮内高等学校と町との連携が実現しており、今後中学校や小学校、それ以下の子どもの頃から、地域の風土に愛着をもつ人を育てる取り組みを検討しています。

「水質調査では、指標生物という『きれいな水に住む水生生物』『ややきれいな水に住む水生生物』で水質を分類します。その分類上で、岩手町を流れる丹藤川は「ややきれいな水」になることが多い。一方で、北上川源泉の『弓弭（ゆはず）の泉』や、中流の盛岡市を流れる北上川の支流の中津川は、いつ調査しても『きれいな水』です。ちなみに川の終点ともいえる河口の石巻では、北上川はもう存分に汚れている。川が汚れてしまうのは、下水処理のインフラの問題でもあり、人間の問題。以前、汚れた北上川に見慣れている石巻の子どもたちを弓弭の泉に連れて行き水を飲もうと言ったら『ええ～～!?』と驚いていましたよ。その驚きも、考えるいいきっかけです」



八幡平市内の小学校の水生生物調査と川遊びの様子。川慣れしている子どもはどんどん潜る。（写真提供：内田尚宏）



弓弭の泉のある御堂観音

貝から見る川の今昔

内田さんは、岩手町が子どもたちが川に親しむ、川に学ぶ機会として、環境学習の時間を作っていることや、岩手町教育委員会が主催する『水源地子ども交流会（里川キャンプ参加体験）』の実施を好評価しています。

「里川キャンプのフィールドは本当にきれいな水質で、カワシンジュガイ（川真珠貝）という貝がたくさんいます。カワシンジュガイは、川の上流にしか生息しないヤマメがないと繁殖・生育しない貝。そんないい川があるのに、当初行政の方は『学校では川に入ってはいけないと言っているので』と子どもたちを川で遊ばせようとなかった。『こんな機会はもったいない』とスタッフを連れて僕自身が川遊びを始めたら、一部の職員さんが『いいね、やろうよ』と賛同してくれた。結果とても好評で、今のプログラムでも川遊びは続いています。ちなみにその時に賛同してくれたのが、現在の岩手町長の佐々木さんです」

カワシンジュガイは寿命が長く、今も岩手町を流れる丹藤川には100年ほど生きているであろう10cm程度のカワシンジュガイが生息していると内田さんは言います。一方で、5～10年程度の個体はなかなか見かけなくなり、それはつまり近年あまり『きれいな川』ではないことを意味しますが、以前はカワシンジュガイがもっと身近だったそう。

「カワシンジュガイは、食べても噛みきれないくらいかなり固くてあまり美味しいのですが、いっぱい採れるものだから昔は出汁によく使ったよ、と年配の方から聞いたことがあります。30～40年前は、『川で貝を取ってきて出汁を取る』という暮らししがあったんですね」



里川キャンプ 2022 の様子（写真提供：内田尚宏）



二枚貝のカワシンジュガイは、絶滅危惧種の淡水貝。大きくなれば殻の内側はアコヤガイのように美しくなる。（写真提供：内田尚宏）



シロザケの旬は秋。サケの死骸も落ち葉も、川や土の養分になる。

目の前の川を辿れば、世界につながる

北上川の別の顔に、シロザケ（白鮭。秋鮭とも言う）が遡上する景色があります。北上川本川だけでなく支流の中津川や零石川でも見られ、なんと河口から約200km離れた盛岡市役所の裏で今もその情景は見られます。

「ただ、近年非常に減っていますね。北上川で生まれたシロザケは、稚魚の状態で石巻に下りて行って北海道・ベーリング海・アラスカ湾の方まで行き、4年後くらいに大きくなって産卵をしに戻ってきます。しかし、最近サバの北上時期とシロザケの稚魚の北上ルート・時期が重なっているようで、シロザケの稚魚がサバに捕食されてしまっているのではと個人的には捉えています。近年温暖化の影響なのか、おそらく海流の変化で、暖かい海域で生息するサバの生息地に変化があり、最近は岩手でも北海道でもサバが捕れるんです。この件はまだ研究中なのでまだはっきりとはしませんが、北上川のシロザケの数が減っているのは事実です」

魚屋さんで並ぶ魚の種類も変わってしまった、という内田さんは、最後にこのシロザケを足がかりに森・川・海といのちの循環の話をしてくれました。

「三陸沖で捕れるシロザケは栄養たっぷりで美味しいのですが、川を上ってくるシロザケは産卵の準備としてもう何も食べずにパサパサの身になっています。そんなシロザケの一生や食物連鎖についても子どもたちに伝えていて、ひとつは今話したような『川の上流で生まれ、海で成長して最期にまた生まれ故郷の川に戻ってくる』という話。

もうひとつは、そのシロザケが海の栄養を森へ運んでいるという話です。最近は、陸地にないはずの海由来の窒素が山で観測されるようになり、これはシロザケが海で体に栄養を蓄えて運んできているのではという意見もあります。

川は、森の栄養分を海に伝えているだけではなく、シロザケを通して海の栄養分を森に運んでいる。それを鳥やクマなどが食べ、排泄し、森の土壤を豊かにして、植物が育まれる。植物の栄養が土から川に滲み出て水生昆虫が育ちイワナやヤマメがその虫を食べて……という生態系の話をするわけです。シロザケの大平原の回遊の話を聞けば、子どもたちは日々目にする北上川がアラスカまでつながっていることを理解します。

身近な川で楽しく遊ぶことをきっかけに、自然について当たり前のように考えがめぐるような環境意識が育まれたらうれしいですね」

サケの大平原の回遊の話を聞けば、いつも見ている北上川がアラスカまでつながっていることを、子どもたちも理解するんです

岩手町から世界へ、 ホッケーがつなぐ夢

全町民ホッケー経験者!?
ホッケーの町、岩手町

カーンと気持ちよく鳴り響く音と軽やかな声を軽かに、辿り着いたのは県内唯一のホッケー場。「ホッケーのまち」と呼ばれる岩手町は、オリンピック日本代表選手など、世界で活躍するホッケー選手を多く輩出しています。

町としてホッケーを町技として普及させているため、幅広い年齢層が競技に親しんでおり、優勝回数全国随一の強豪校である岩手県立沼宮内高校ホッケー部や、社会人チームなど町民を中心としたホッケーチームもあります。町民ホッケー大会では未経験者がホッケーを楽しむ機会もあるほどこの町で愛されているスポーツです。

◎岩手町ホッケー場

岩手県岩手郡岩手町大字字子抱第3地割2番地



岩手町の学校に通う生徒なら、その多くがホッケーのスティックを握ったことがあるというほど、岩手町は町ぐるみでホッケーに親しむ環境づくりをしています。また、実はホッケーは、半身の姿勢で走り続ける「フィールドの格闘技」とも呼ばれているほど、過酷なスポーツのひとつ。

幼い頃からこのスポーツに触れている子どもたちにとっては「あきらめない・へこたれない・くじけない」など精神面でも鍛えられる存在だといいます。

また、岩手町は東京オリンピックのホストタウンとしてアイルランド女子ホッケーチームの事前キャンプを受け入れ、その後もアイルランドとのスポーツ・文化交流も積極的に行ってています。このフィールドからまだまだ世界へと飛び立つ才能が輩出されていくことでしょう。今後の活躍が楽しみです。

この町の 酸いも 甘いも

この町の記憶を聞くなら
町の喫茶やスナックへ

岩手町には、温かみのある小さなスナックや喫茶店がたくさんあります。そこには、みんなから愛される「まちのおかあさん」なる存在がいて、この町の酸いも甘いも、色々な話を聞くことができます。岩手町のメインストリート、沼宮内の太町商店街で30年以上前からお店を構える「玉露」もその一つ。玉露のママの西田美紀子さんは、気軽に毎日この店に来て欲しい、という思いでほとんど休まずお店を営業されています。

かつて東京に遊びに行った時、夜にお客さんの予約が入ったからと、とんぼ返りして岩手町に戻ってきたなんて出来事もあったそう。西田さんとお話をしていると、この町の歴史や、人々のさまざまな物語を聞くことができます。



●玉露

岩手県岩手郡岩手町大字沼宮内第7地割30



玉露のほど近くにある喫茶「ペコ」も、一度行ったら、その居心地よさにまるで親戚の家にきた気持ちになってしまうような場所です。オーナーの澤口松子（さわぐちしょうこ）さんは、最近ハマっているパークゴルフの魅力を熱弁してくれたり、町の良さをいきいきと話してくれます。丁寧に淹れられた、あたたかいコーヒーを飲みながらそんなおかあさんたちの話を聞いているとあっという間に時間が流れてしまいます。他にもまだまだディープで、あたたかいお店が岩手町にはたくさんあります。岩手町のローカルをもっと知りたい方は、ぜひ、この町で飲み歩いてどっぷりこの町に浸ってみてください。



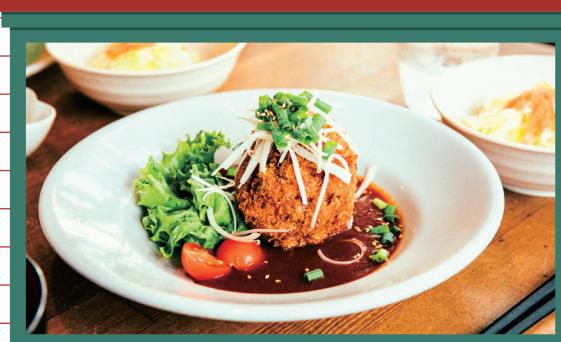
●ペコ

岩手県岩手郡岩手町大字江戸内第6地割8

思い思いの時間を過ごす、町の憩いの場

ヴィラ

名物メニューは沼宮内店限定の「ばくだんハンバーグ」。いわて短角牛を使ったボリューム満点の一品です。

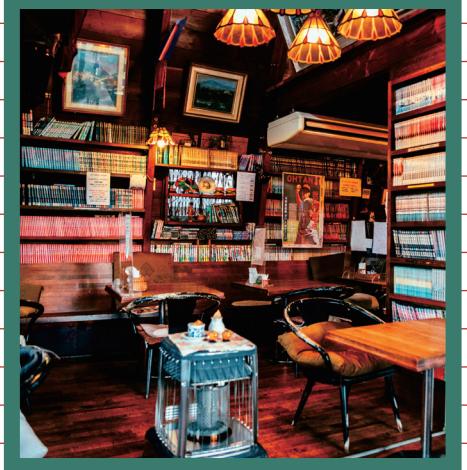


コーヒーは自家焙煎した「ヴィラ・ブレンド」がおすすめ。ほのかな苦味の中にもみのある味わいが特徴で、4種類の豆をブレンドしています。



店内に入ると、コーヒーの香ばしい香りと共に、壁間にぎっしりと並ぶ漫画が目に留まります。懐かしい漫画や珍しい漫画まで、子どもも心をくすぐられるものばかり。食事もどれも美味しく、ボリューム満点。自家焙煎しているこだわりのコーヒーを飲みながら一人で漫画を読んだり、作業したり、友人と長居したり、思い思いの時間を過ごしているお客様のいる店内の風景が、心地よい場所です。岩手町には、まだまだディープでついつい時間を忘れてしまう、隠れたスポットがあります。気になる方は、岩手町の公式Instagramからおすすめ情報や最新情報を是非チェックしてみてください。

4号線サロンヴィラ 沼宮内店
〒028-4301 岩手県岩手郡岩手町大字沼宮内第15地割21-3



有識者・外部専門人材

地域共創人材の育成

町の次世代を担い、持続可能な町を作り続ける
主体的な人材の発掘・育成

プランディング
シビックプライドの向上

SDGs 姉妹都市連携

SDGs 先進的交流
・3つのカルチャー／アートを共創
・経済交流による互恵関係構築

域外販路開拓
Iターン・観光との接続

リビングラボ(いわて町ラボ)

農業・林業・健康スポーツをテーマに
暮らしのなかで実証実験

大学との連携
学生企業体験

起業と対話を通じた産業活性化

持続可能な新しい「しごと」を創出する人材の発掘・育成
およびラボ機能の充足と経済循環ネットワークの形成

岩手町 SDGs 未来都市共創プロジェクトを支える 4 つの軸

01. 共創の核となる人材の育成

まちづくりは人づくり。当事者もそうでない人も、課題解決に向かってお互いの得意を活かして共に取り組む「共創」の姿勢が大切と考えています。まちのことが自分ごとになるような、「共創」の視点を育むプログラムを地域で実施し、子どもから大人まで、対話と実践の場をつくっています。



02. 都市・地域間の連携

都市や地域が単独で活動するのではなく、地方都市が抱える共通課題を介して連携し、お互いの得意領域や集合知を活かしながら取り組むことが大事だと考えています。岩手町は、東京都豊島区、埼玉県さいたま市、宮城県石巻市をはじめ、フランスやデンマークといった海外の都市も含め、SDGs 姉妹都市提携を現在計画しています（2022 年 12 月現在）。



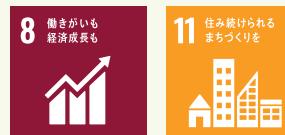
03. リビングラボの活用

リビングラボとは、まちの課題を暮らしのなかで解決するための“実験”を繰り返す手法です。岩手町では「いわて町ラボ」という名で、農業、林業、健康・スポーツをテーマに、子どもから大人まで関われる企画を立てたり専門家を招いてディスカッションを行うなど、さまざまな取り組みを行っています。



04. 起業と対話を通じた産業活性化

まちを持続可能にするための要の一つ、産業振興。岩手町では、地域のイベントや高校の授業で、仕事を通して地域とのつながりを深める機会を設けています。これからビジネスを起こそうとする人の挑戦の後押しや、地元企業での仕事体験によって生徒が地元の産業に関心をもつきっかけにつながることを期待しています。



岩手町 SDGs 未来都市共創プロジェクト一覧

令和2年度実施プロジェクトリスト

リビングラボ	いわて町ラボ（農業ラボ） いわて町ラボ（健幸ラボ） いわて町ラボ（森林ラボ） いわて町ラボ（エネルギー・ラボ） 職員向けいわて町ラボの実施 商材磨き上げ
産業振興	情報発信コンテンツ作成（販路拡大支援） 志塾（起業支援）の実施
都市間連携	大崎町首長対談
人材育成	トークフォーラム 岩手町と僕らの未来開拓プロジェクト（いわぶろ3days） 丸の内 x SDGs Tour vol.1 の開催
普及啓発	SDGs 未来都市創造フォーラムの開催 岩手町 SDGs 未来都市創造プロジェクト Web サイトの制作 岩手町 SDGs 未来都市共創プロジェクトロゴ作成

令和3年度実施プロジェクトリスト

リビングラボ	いわて町ラボ 東京セッションの開催 いわて町ラボ キックオフフォーラムの開催 いわて町ラボ（農業ラボ）農を核とした交流人口・関係人口拡大と農業の多様な担い手の育成 いわて町ラボ（農業ラボ）先端技術を活用した実験村づくりで、岩手町を農起業のメッカへ いわて町ラボ（健幸ラボ）地域の特徴・資源を生かした多世代交流型の子供食堂モデルの構築 いわて町ラボ（健幸ラボ）岩手町まるごと健幸フィールド化プロジェクト いわて町ラボ（森林ラボ）美しい100年の森プロジェクト いわて町ラボ（森林ラボ）地産材を活用した潤いのある公共空間づくり いわて町ラボ（エネルギー・ラボ）SMart RE100 住宅モデル構築プロジェクト 商材磨き上げ 販路支援セミナーの開催 丸の内 x SDGs Tour vol.2 の開催 志塾（起業支援）の実施 まちの小さな起業塾（世界一楽しいきっかけづくり） 地区別ワークショップ（にぎわいみーついんぐ）
産業振興	トークフォーラム ファシリテーション研修 岩手町と僕らの未来開拓プロジェクト（いわぶろ3days） 沼宮内高校総合的な探究（起業体験プログラム） みらいの教室 豊島区首長対談 石巻市首長対談 下川町首長対談
人材育成	大学との連携（岩手県立大学 講義「法律・行政実習 A」） I-Valley パンフレット作成 プロジェクト普及啓発用動画制作
都市間連携	大学との連携（明治大学生岡ゼミによる岩手町商材調査&試験販売）
関係人口	
普及啓発	

令和4年度実施プロジェクトリスト

リビングラボ	岩手町まるごと健幸フィールド化プロジェクト 農業の担い手確保プロジェクト 多世代交流型子ども食堂プロジェクト 美しい100年の森プロジェクト スマート農業実験プロジェクト 地産木材活用プロジェクト A チーム（地域課題解決チーム） エネルギー・環境プロジェクト（プラ油化・再資源化） レンタサイクル活用 移動式屋外販売台活用 AI サイネージ実証 いわて町ラボ 東京セッションの開催 いわて町ラボ キックオフフォーラムの開催 志塾（起業支援）の実施 商材磨き上げ SDGs 認証制度 新観光モデル構築（インバウンド、産業観光） 世界一楽しいきっかけづくり にぎわいみーついんぐ トークフォーラム 職員向けファシリテーション研修 岩手町と僕らの未来開拓プロジェクト（いわぶろ3days） 沼宮内高校総合的な探究の時間（企業活動体験プログラム） SDGs 副読本の制作 いわてまち学の整理 SDGs 姉妹都市連携 さいたま市 x SDGs Tour の開催 さいたま市首長対談 豊島区 x SDGs Tour の開催 自治体間連携フォーラムの開催 国内外自治体視察の実施 日仏自治体交流会議への参加 いわてまち SDGs ライター制度の構築 Web サイトリニューアル SDGs プロジェクト紹介冊子作成（ZINE・タブロイド紙） 情報発信コンテンツ作成（移住・定住） ファムツアーアイ（インバウンドモデルツアーアイ）の実施 企業向け SDGs 研修テストツアーアイの実施 大学との連携（岩手県立大学 講義「法律・行政実習 A」）
産業振興	
人材育成	
都市間連携	
普及啓発	
関係人口	

岩手町の音に 耳をすませる



これは、あなたの感覚を研ぎ澄ますための岩手町を舞台にした感覚のエクササイズシートです。下記の3つのステップに従って、岩手町の音を探してみましょう。

1. 感覚を研ぎ澄ませて、岩手町の音を聴いてみましょう。
2. 聽こえる音の種類によって、地図に色を塗りましょう。
木々の音は緑色、水の音は青色、鳥の声は黄色、車や電車の音はオレンジ色など。
自分でルールを決めてても大丈夫です。
3. 聽こえた音の特徴を横にメモしましょう。



いわて沼宮内駅までのアクセス

- IGR いわて銀河鉄道
盛岡駅より：約 30 分
- 新幹線
東京駅より：約 2 時間 30 分
盛岡駅より：約 10 分
新函館北斗駅より：約 1 時間 50 分
- 自動車
東北自動車道滝沢 I.C より
国道 4 号線で北へ：約 30 分
- バス
盛岡駅から路線バス
(JR バス・岩手県北バス：約 54 分)
- 飛行機
札幌 …いわて花巻：約 55 分
名古屋 …いわて花巻：約 75 分
大阪 …いわて花巻：約 80 分

宿泊情報

- ホテル黒石温泉
〒 028-4421 | 岩手県岩手郡岩手町大字一方井第 1 地割 43-247
- 川原新田ドライブイン
〒 028-4304 | 岩手県岩手郡岩手町大字子抱第 6 地割 37-2
- 旅館 笹相
〒 028-4307 | 岩手県岩手郡岩手町大字五日市第 12 地割 75-5
- モビリタコート岩手
〒 028-4304 | 岩手県岩手郡岩手町大字子抱第 3 地割 2 番地



Web 記事「岩手町に、泊まる」はこちらから！

Website



iwatetown-sdgs.jp

Twitter



@iwatemachi_koho

Instagram



@kikoeru_iwate

Facebook



iwatetown

<発行・問い合わせ先>

岩手町みらい創造課

〒 028-4395 岩手県岩手郡岩手町大字五日市 10-44

TEL : 0195-62-2111 | Mail : mirai-1@town.iwate.iwate.jp



岩手町SDGs
未来都市
共創プロジェクト

